

第3回 世田谷区基本構想審議会 次第

議 題

1. 事務連絡等
2. 今後の審議会の進行について
 - (1) 起草委員会の設置について (資料1)
 - (2) 全体スケジュールの修正について (資料2)
3. 各部会からの報告 (資料3、資料4①～⑥)
4. 基本構想・基本計画大綱の構成について (資料3)
5. 基本構想・基本計画大綱のたたき台作成に向けて
6. その他

【資料】

- | | | |
|-----|-------------------------------|--------|
| 資料1 | 世田谷区基本構想審議会起草委員会設置について | |
| 資料2 | 基本構想審議会スケジュール | |
| 資料3 | 基本構想・基本計画大綱の構成案 (第1部会の議論より作成) | |
| 資料4 | 第1部会～第3部会の議論の整理 | |
| 資料5 | 起草委員会検討の素材 | (当日配付) |
| 資料6 | 子どもの意見について | (当日配付) |
| 資料7 | 区長と区民の意見交換会の報告 | (当日配付) |
| 資料8 | 区民アンケートの実施について | (当日配付) |

《次回予定》

第4回審議会 12月25日(火) 18時30分 会場未定

平成24年10月18日

世田谷区基本構想審議会起草委員会設置について

1. 意義と役割

世田谷区基本構想審議会（以下「審議会」という。）の諮問事項に対する答申案の作成にあたり、審議会の議論を整理し、文案を起草するための作業部会として、起草委員会を設置する。

2. 起草委員会の構成

審議会会長、会長職務代理、審議会各部会部会長及び副部会長、その他審議会会長が指名し審議会が承認した委員で構成する。

3. 座長、副座長

審議会会長を座長とし、会長職務代理を副座長とする。

4. 開催

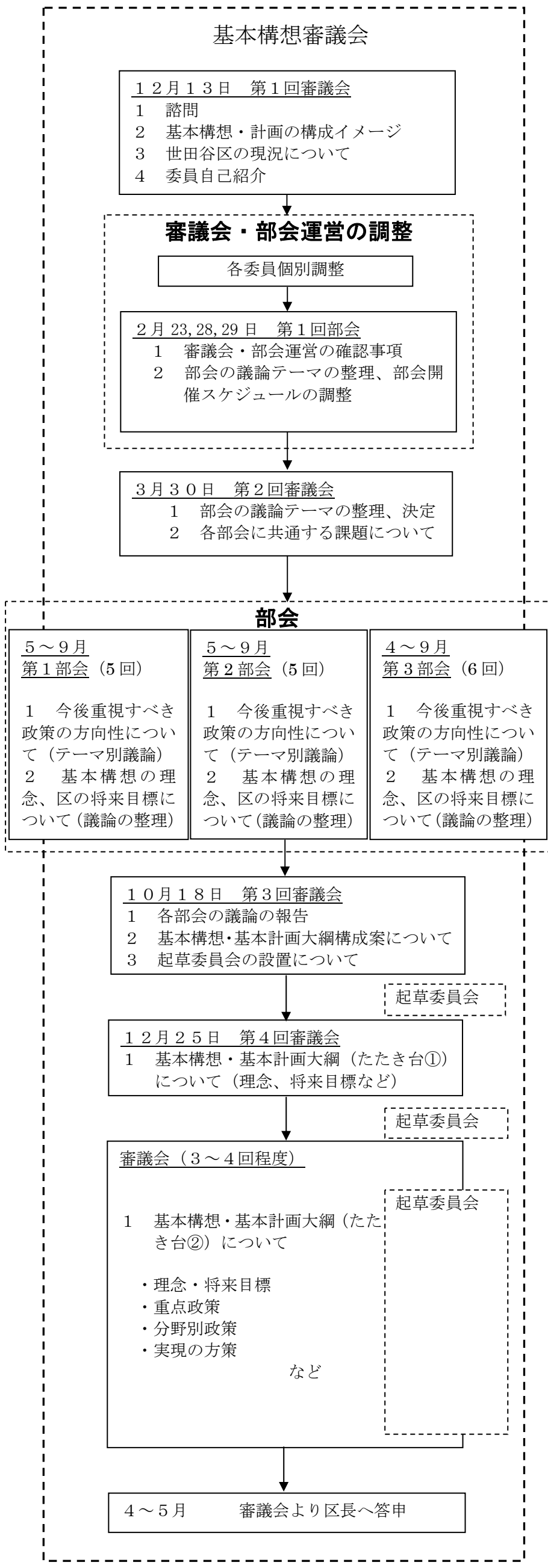
第3回審議会後より、作業の必要に応じて、座長が招集する。

5. その他

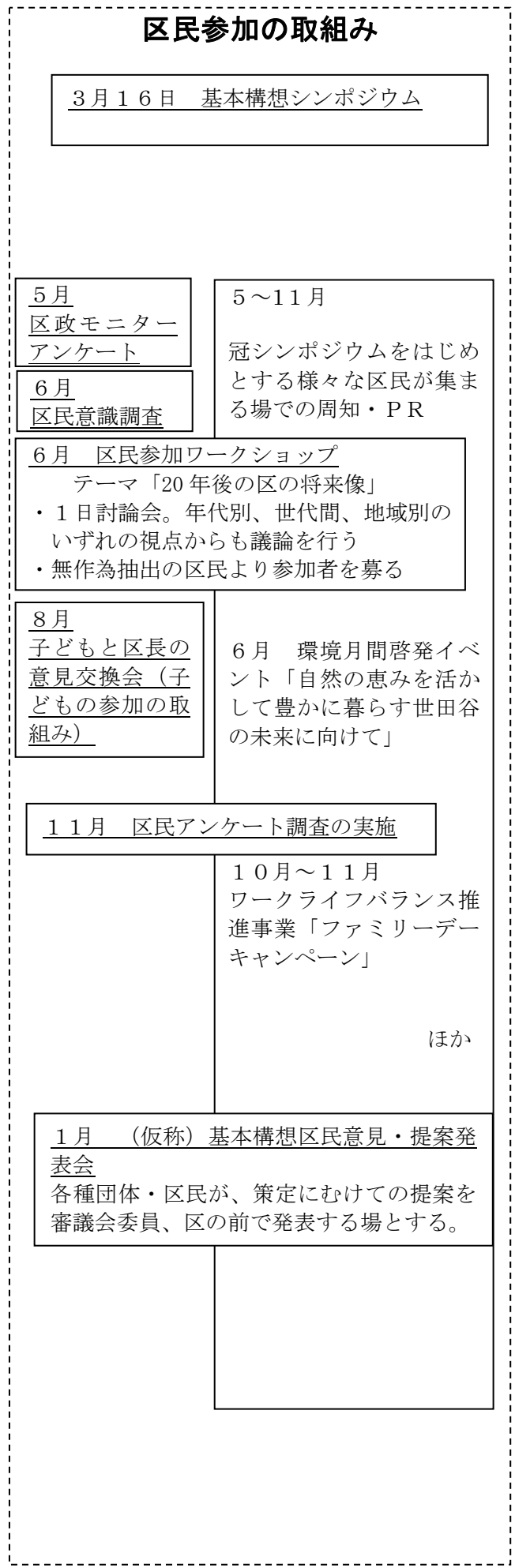
その他必要な事項については、審議会で定める。

基本構想審議会スケジュール

平成
24年



区民参加・意見集約等



平成
25年

基本構想 : 平成25年9月 区議会に提案
基本計画、実施計画 : 平成25年3月より検討⇒平成26年2月議会報告

基本構想・基本計画大綱の構成案（第1部会の議論より作成）

…第1部会での意見

- ・3.11以降の新しい基本構想として、他区にはない**世田谷らしいもの**としての議論が必要
- ・徹底した現状認識の上で、価値・理念を実現するために**いかに現実に立ち向かい努力するか**
- ・20年を見据えた展望でよいのか

- ・行政計画か公共計画（公共的な方針）か
- ・他の分野別計画などとの関係

- ・世田谷に関する**歴史的沿革及び社会状況を踏まえること**が必要

- ・共有すべき**価値**
- ・区の憲法的なものとする場合、基本理念とは**価値の発信、主体は区民**

基本構想

- 20年先を見据えた構想（但し、社会の大きな変化を考慮し10年で見直す）
- 基本構想は区議会で議決する

1 前文

(1)意義と役割

- 区民、行政、事業者等が共有する、公共的な方針

(2)時代認識、背景

世田谷区の歴史的背景や現況、社会動向を示す。

(例)

世田谷区の歴史、沿革

- 区の成り立ち
- 世田谷区の街並形成の歴史
- これまでの成果～街づくり条例ほか
- 現在の社会状況、今後の動向
- 3.11後のわが国の状況～国民の意識の変化

○人口動態

世田谷区の地域像

- まちの姿の変化、緑被率の変化
- 世帯構成、世帯規模の変化
- 財政状況 等

2 基本理念

世田谷区はこうあるべきだという基本的な考え方、共有する価値を示す。

(キーワードの例)

- 参加、参画、自治、自立（自律）
- 共生社会、社会的包摂、多様な価値の尊重、多世代交流
- 省・小エネルギー生活、自然との共生
- 歴史と文化の尊重、次世代への継承

3 将来目標

多くの区民が自分自身の問題意識や目指すべき姿として共有し、行動の動機付けとなる目標

(例)

- 地域での人々のつながりの強化と、地域の担い手の地域での育成
- 防災コミュニティ都市世田谷
- 魅力的でにぎわいのある「歩いて暮らせるまち」世田谷
- あらゆる人が地域で自分らしく暮らさつづける社会
- 地域の中で子どもが育つ世田谷

4 基本構想実現に向けて(実現の方策)

区民、行政、事業者等の役割や、実現に向けたしくみ、制度のあり方などを示す。

- ・「〇〇のまち」ではなく、**重点的なものをリアリティ**を絡めて書く（絞込み）
- ・「〇〇のまちづくり」という将来像にどれ程の意味があるのか
- ・世田谷は〇〇が一番といった**圧倒的な目標**
- ・**義務と権利**の両方を盛り込む
- ・**基本計画へつなげる方向性**を示す
- ・できないことは書かない。具体的にどうするか

基本計画大綱

- 基本計画の骨子を示す

1 計画の背景

2 視点 計画推進にあたっての視点

3 重点政策

基本構想の将来目標を受けて政策の方向性を示す。
・区政を牽引する取組み
・分野横断的な総合的方針
・緊急的取組み

4 分野別政策(政策体系)

分野別の**基本方針**

審議会での議論を、分野別（5分類程度の大分類を想定）に整理し、基本的な方針案を示す。

5 その他

基本計画の実現に向けて必要な方策等を示す。

- (例)
- 執行体制
 - 行政経営改革
 - 財政計画
 - 計画のローリング方法など

- ・行政と住民の**役割分担**、ガバナンス・**協働**をどう進めていくかを書き込む
- ・**区民参加及び参画**のシステム化
- ・常に**再確認・チェック**し、必要な場合は徹底して見直す（住民が評価に責任を持って参加）
- ・財政面が重要。**身の丈にあった基本構想**

第1部会の議論の整理

(1) 基本構想の位置付け、構成等

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
<ul style="list-style-type: none"> 基本構想は、区民1人1人が自分のものと思い、世田谷で暮らす際の指針や行動する際に基本となるものであるべき 	【基本構想の位置付けについて】 <ul style="list-style-type: none"> 基本構想は、区民1人1人が自分のものと思い世田谷で暮らす際の指針や行動する際に基本となるものであるべき。 いかに生き甲斐を持って生き、死に甲斐を持って死ぬか。 	【基本構想の位置付けについて】 <ul style="list-style-type: none"> 基本構想は、区民・事業者・行政が共有する「公共計画」と位置付ける。 住民統合や動機付けの機能を果たすためには、力強い理念と徹底したリアリティが必要。
	【基本構想の構成について】 <ul style="list-style-type: none"> 「〇〇のまち」という表記ではなく、暮らしのイメージからつむぎあげるべき。 美辞麗句ではなく、具体的な検討をすべき。 できないことは書かない。具体的に戦略的にどう実現していくかの議論が必要。 どの自治体でもあるような基本構想とすべきではない。 基本構想の計画期間20年は適当か。10年という考え方もあるのではないか。 	【基本構想の構成について】 <ul style="list-style-type: none"> 現行の基本構想のうち「はじめに」「意義と役割」「理念」「実現の方策」の部分は新たな基本構想でも必要。一方、「将来像」の部分は現行の基本構想のような総論的なものではなく、重点的に「これをやる」というものを記載していく。 「はじめに」の中で、世田谷という土地の歴史や沿革を示していく。 他区にはない世田谷らしい内容、世田谷の地域性を反映した内容とする。 計画期間については20年として議論を進めていく。
	【世田谷区の様々な行政計画との関係について】 <ul style="list-style-type: none"> 都市マスタープランなど様々な行政計画と連動させるべき。 	【世田谷区の様々な行政計画との関係について】 <ul style="list-style-type: none"> 世田谷区の様々な行政計画についても、新たな基本構想の策定に合わせて、改定作業を進めていく。
	【区議会での議決について】 <ul style="list-style-type: none"> 区議会で議決する範囲は、基本構想のみとするか、基本計画まで含めるべきか。 基本構想を区の条例と位置付け、区議会で議決するという方法もある。基本構想を条例として位置付けることについてどう考えるべきか。 	【区議会での議決について】 <ul style="list-style-type: none"> 基本構想までを議決対象とし、基本計画については議決の対象としないものとして議論を進めていく。 条例として位置付けるかどうかについては、基本構想の内容が条例として位置付けることを必要とするものになるかどうかであり、改めて判断する。
【基本構想の進捗管理について】 <ul style="list-style-type: none"> チェックの手段が担保されないと絵に描いた餅になってしまう。 	【基本構想の進捗管理について】 <ul style="list-style-type: none"> 区議会がチェックを担う。 基本構想の進捗を住民が主体的にチェックできる仕組みも必要。 	

(2) テーマに関する議論

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性							
○地域での新たなつながりの形成 <ul style="list-style-type: none"> 若い人達が参加できる組織・団体 ソーシャルビジネス等の参画 4層の地域コミュニティの単位に応じた対応 	【情報・コミュニケーションについて】 <ul style="list-style-type: none"> 自らつながりを持てる人と持てない人がいる。 地域で個人情報をごくまで共有できるかは、社会がぎすぎすしているか寛容かで決まる。 情報に関心を持つ層を増やすだけだと社会をめちゃくちゃにしてしまう危険性もある（モンスタークレマー）。 日本は、世界の中でも情報が本当に正しいのかどうかを判断することをしない傾向が強い。これを変えないと、フィクションの中ででたらめな決定をし続けることになり、国家レベルでも共同体レベルでも生き残れない。 無関心層を減らしていくべき。 	【情報・コミュニケーションについて】 <ul style="list-style-type: none"> 地域で活動する団体などに参加するための情報パッケージの整備と提供。 コンテンツの内容のほかに、受け手側の環境（社会のあり様）を整える必要がある。 無関心層を減らすためには、メッセージをわかりやすく、繰り返し伝えていくことも必要。 声をあげない人の声を受け止める工夫（無作為抽出型ワークショップなど）。 							
	【地域を考える場合の単位について】 <ul style="list-style-type: none"> 世田谷区には、4層の地域コミュニティの単位（①総合支所、②出張所・まちづくりセンター、③小学校区、④町会・自治会）がある。 地域コミュニティについて語る際には、どの空間的範囲を指しているのかを明確にして議論すべき。 空間範囲の違いによって、公共的な問題の解決に際しての住民と行政との関係が異なってくる。 	【地域を考える場合の単位について】 <ul style="list-style-type: none"> 地域コミュニティを考える場合の最大範囲は「総合支所」の空間範囲。5つの総合支所ごとに地域特性がきれいにわかる。 空間範囲の違いによる公共的課題への取組みの相違 <table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">①総合支所の範囲</td> <td>課題の解決には行政とのタイアップが不可欠</td> </tr> <tr> <td>②出張所・まちづくりセンターの範囲</td> <td>住民と行政が対等なパートナーになって解決</td> </tr> <tr> <td>③小学校区の範囲</td> <td>住民と行政が対等なパートナーになって解決</td> </tr> <tr> <td>④町会・自治会の範囲</td> <td>住民が相当な部分まで自ら課題を解決</td> </tr> </table> 防災を考えた場合の空間範囲は、避難所となる小学校区から出張所・まちづくりセンター程度まで。 	①総合支所の範囲	課題の解決には行政とのタイアップが不可欠	②出張所・まちづくりセンターの範囲	住民と行政が対等なパートナーになって解決	③小学校区の範囲	住民と行政が対等なパートナーになって解決	④町会・自治会の範囲
①総合支所の範囲	課題の解決には行政とのタイアップが不可欠								
②出張所・まちづくりセンターの範囲	住民と行政が対等なパートナーになって解決								
③小学校区の範囲	住民と行政が対等なパートナーになって解決								
④町会・自治会の範囲	住民が相当な部分まで自ら課題を解決								

第1部会の議論の整理

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
<p>○行政と区民・事業者の役割の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政は直接事業を行わず、地域社会を下から支えるルール管理者 <p>○基本構想の確実な実現</p> <ul style="list-style-type: none"> 進捗状況の確実な管理 身の丈（財政状況）に応じた施策 	<p>【地域コミュニティのあり方について】</p> <ul style="list-style-type: none"> まちへのコミットメント（責任を持ったかかわり）が存在しない。安全・安心・便利・快適なまちをつくるだけでは区民の尊厳には結びつかない。 大人の目が隅々まで行き届いて安心、安全をチェックすることが本当に良いことなのかどうかを考えるべき。 共同体がなくなり、個人がどうすべきかわからなくなり、マニュアルができてきた。マニュアルが象徴するのはコミュニケーションの空洞化である。 	<p>【地域コミュニティのあり方について】</p> <ul style="list-style-type: none"> このまちでなければ嫌だ、便利な場所に引っ越すのは嫌だという固有のコミットメントを生み出すためには場所を主体とすべき。世田谷に住むということは、こういう場所に住むのだということを模索する。 地域のことを地域で議論していける仕組み・環境が必要。手法は地域の範囲やテーマによる。 外国人、障害者などを含む色々な事情を持つ人達を包摂できる社会を目指すべき。
	<p>【地域で活動する団体について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政情報の周知などで町会・自治会の存在に頼るところが大きいという実態があるが、高齢化・新しい人が入らないという課題がある。 戦前から同じような形になっている町会・自治会も多く、その部分は直すべき。 コミュニティの安全保障を考えるべき。 P T Aなど小学校を核としたネットワークが必要。 投資＝儲け主義＝公共性に反するという間違った通念により、地域への投資家の参加はズタズタにされている。投資家のチャレンジがキーワード。 	<p>【地域で活動する団体について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 若い人が地域で参加できるように組織・団体を考えていく。 新しい公共を地域の若い人を中心につくっていく。 町会・自治会・N P O・各種地域団体との関係、新しい公共、住民参加や協働について区としての考えを出していくべき。 町会・自治会・N P O・小学校区単位での関係など様々な組織の色々なつながりをつなげていく。 高齢者、障害者、子育てなどを支える支援ネットワークの形成。 N P Oやソーシャルビジネスのノウハウをもっと活用すべき（投資家のチャレンジを喚起する環境の整備）。 ノウハウのあるコミュニティビジネスを呼び込んで、コミュニティを活性化させる（ただし、町会の仕事にはコミュニティビジネスには馴染まないものもあるのではないかな）。
	<p>【行政の役割について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治体は前に出るのではなく、下で支えるような位置づけが大切。 諸外国では行政が直接事業を行うことや補助金行政をやめて、ルール管理者に徹している。 行政と地域住民やコミュニティビジネスなどとの役割分担が必要。 	<p>【行政の役割について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政に参加するための情報パッケージを整備すべき。 区民意見反映・区民参画の手法の制度化。 行政は地域に入っていく、緊密にコミュニケーションをとりながら知恵を集約すべき。 行政はルールメーカーであるべき。ルールのパラメーターを調整し、社会によいことをすれば儲かるというルールで事業者を誘導する。 行政がなすべきは、N P O等の事業者が継続的に事業を営む動機を持ちえるようなソースの配置を行いルールの変更を行うこと。
	<p>【行政組織・地域行政制度について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政は区民から見ると縦割りにしかなくない。区の窓口、参加の仕組みのあり方をシステム化できないか。 行政窓口の合理性・効率性を考えると、出張所・まちづくりセンターにあらゆるサービスを備えることは難しい。一方、出張所・まちづくりセンターは防災の観点からは重要。 	<p>【行政組織・地域行政制度について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域に暮らす区民自身が地域課題を自分たちの力で解決できるための力を持つためには、出張所・まちづくりセンターにある程度の権限・人員配分が必要。 総合支所単位エリアでの地域特性を活かした行政。 4層の地域コミュニティの単位（①総合支所、②出張所・まちづくりセンター、③小学校区、④町会・自治会）に応じた地域コミュニティと行政との関係の検討と住民参画の手法の検討。
	<p>【地方政府としての行政について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 都や国からどう自立するかがこれからの20年の世田谷区にとって非常に大事。 中央省庁が持っている規制・権限とぶつかる部分について、規制を緩める必要がある。 	<p>【地方政府としての行政について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要な行政権限と財源の確保（教員人事権、児童相談所の移管など）。
	<p>【行政経営改革・財政について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政経営改革の視点を忘れてはならない。効果的で効率的な行政執行体制をどう確立するのか。 財政面が重要。 	<p>【行政経営改革・財政について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政経営改革の徹底。 公共サービスにおけるソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの役割の拡大。 身の丈にあった基本構想とすべき。

第1部会の議論の整理（基本理念、将来目標、重点政策の検討に向けた整理）

全体に共通するキーワード ※基本構想の基本理念の要素となるもの	区が特に目指すべき姿 ※基本構想の将来目標の要素となるもの	政策の方向性 ※基本計画大綱の重点政策・分野別政策の要素となるもの
<p>【基本理念の考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基本構想は、区民1人1人が自分のものと思い、世田谷で暮らし、行動する指針となるものであるべき <p>【キーワード】</p> <ul style="list-style-type: none"> いかに生き甲斐を持って生き死に甲斐を持って死ぬか まちへのコミットメント（責任を持ったかかわり） 与えられた安全安心を求めるのではなく、自らの責任と判断で行動する社会 空洞化したコミュニケーション・マニュアル社会に代わる新たな地域でのつながり 防災をキーワードとしたコミュニティ形成 	<p>○地域でのつながりの強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 多くの人たちが参加できる地域組織・団体のあり方を工夫していくとともに、ソーシャルビジネス等の参画により新しい地域ネットワークをつくる。 世田谷区の4層の地域コミュニティの単位（①総合支所、②出張所・まちづくりセンター、③小学校区、④町会・自治会）のそれぞれの特性に応じた、地域の公共的課題への対応を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 無関心層をなくし、区政に関心をもってもらうための取組み（情報提供、区民意見反映、区民参画の手法の制度化など）を進める。 NPO、ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの地域参加を促す環境を整備する。 4層の地域コミュニティの単位に応じ、行政と区民の関係の持ち方を整理する。
<ul style="list-style-type: none"> 空洞化したコミュニケーション・マニュアル社会に代わる新たな地域でのつながり 防災をキーワードとしたコミュニティ形成 4層の地域コミュニティ NPO やソーシャルビジネス、投資家のチャレンジの誘導 様々な事情を持つ人達の包摂（社会で包み込む） 	<p>○行政と区民・事業者の役割の見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政は、行政しか担えない基礎的インフラ整備などの取組みに努め、区民や事業者が活躍できる場面では、地域社会を下から支えるルール管理者へと役割を変えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 公共サービスにおけるNPOや地域との連携・参画・協働を推進する。 行政は、区民・事業者が地域の課題解決に向けた活動の動機・意欲を持ち参画することができるようなルール・仕組みづくりを行う。
	<p>○基本構想の確実な実現</p> <ul style="list-style-type: none"> 進捗状況の確実な管理を行う。 身の丈（財政状況）に応じた施策とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 区民による基本構想や行政施策・行政計画の進捗状況の評価のしくみを整備する。 行政経営改革を徹底する。 都区制度改革、自治権拡充の取組みを進め、必要な行政権限と財源の確保（教員人事権等）を目指す。

第2部会の議論の整理

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
<p>【地域の個性を活かした、歩いて楽しいまちづくりの推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 誰もが歩いて暮らせる、地域で楽しめる、魅力にあふれたまちづくりを進める 	<p>【街づくりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 将来を見据えた地域としてのデザインが必要である。 道路やコミュニティバスなど行政でないとできないことは進めていくべきである。 多様な手法の組み合わせによりみどり率を高めることが重要である。 公共施設など、都市の更新時期に入っており、うまく更新していくこと、老朽化対策が大切である。 	<p>【街づくりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 区は、現在も住みやすさの向上に寄与している用賀プロムナードなど、良好な景観を創出し、先進的な取り組みを進めてきた。将来を見据え、デザイナーなどの専門的な知見も活用して、地域のデザインを発信する仕組みが必要である。イベント掲示用の看板や、ごみ集積所などの様々な設備についても、まちの景観づくりという観点からデザインや配置を考えたほうがよい。 都市計画道路の整備や道路率等は23区で低位となっている。行政でないとできないことをしっかり進めていくことも大切である。 道路が整備された地域がある一方で、狭あいな道路が多く、木造住宅が密集している地域もある。そうした地域ごとの課題については、自らの地域で議論し共有することが大切である。 高齢者、独居老人が多く住んでいるところは、コミュニティバスや南北交通道路を整備しないと、買い物難民になってしまう。自転車道のネットワークについても重点的に考える必要がある。交通ネットワーク整備の前提として南北交通の道路施策が議論となる。 人口の少ない区西部に緑が多い。人口の多い地域のみどり、地域ごとのみどりをどう高めていくかが重要である。また、国分寺崖線などの緑地や屋敷林・農地のみずやみどりの質の保全という視点も必要である。 区内でマンションが増える中で緑地が減少している。建築条例等で人が住んでいる地域の緑地を守ることや、樹木墓地など多様な手法の活用によって緑地が増えるよう誘導するなどの都市計画が必要である。 景観や風景づくりが世田谷ブランドづくりに大切であり、「歩いて暮らせる街づくり」や「まちなか観光」、「都市デザイン」と切り離せない。歴史的な資源を大切にし、まちの個性や生き立ちなど、歴史を活かした街づくりを考えることが大切である。
<p>【防災コミュニティ都市世田谷の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> 3.11の教訓を踏まえ、区民を主体とした災害に強い地域社会をつくる 「減災」を共通キーワードとして、日常の地域住民のつながりを高める 日々の地域の暮らしの中で楽しみながら防災力をつちかう 	<p>【防災について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 防災につながるコミュニティづくりが課題である。 住宅の耐震強化を進める必要がある。 早期復興を目指した仕組みづくりが必要である。 緊急時の区への対応方針の発信が必要である。 集中豪雨への対応は喫緊の課題である。 防災とまちづくりは公助の役割が果たされ、備えがないと自助・共助が有効に機能しない。 被害を想定し、行政と区民が一体となって減災に向けて取り組む。 	<p>【防災について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 普段からまちを歩いて、自分の住む環境、住む場所をよく知っておくことが大事である。 日頃から地域ぐるみで避難訓練などを通じて、避難することに慣れることがもちろん、知り合いが増えることで日常生活が楽しくなるのではないかな。 災害時に、商店街（避難誘導、情報提供）や区内大学の学生など若い力の果たす役割は大きい。そのため、災害時の商店街の役割を明確化することや、有事の際にボランティアをしたい人が集まる場所を設定しておくなど、日頃から地域のコネクションづくりに取り組む必要がある。 災害時の独居老人対策を民生委員に全て委ねるのは問題がある。民生委員を中心に様々な人が手分けして行うことが大切である。 震災では建物の倒壊による死者が多いため区内の住宅の耐震強化は大きな課題であり、建て替えを推進できれば、産業にとってもプラスになる。 被災直後にどこに避難したらよいかを考える際などに、土地勘の有無が生死を分ける。歩いて楽しいまちづくりの進展は、区民の土地勘の向上にもつながるため、防災という観点からも重要である。 復興が早いまち世田谷を目指した構想を軸とし、商店街等がコミュニティに関わる仕組みづくりや、有識者を招聘して議論するなどの取り組みが必要である。 高齢者の多くは病院に通院することが主な外出理由となっていることから、高齢者の防災については病院とセットで考えていく必要があるだろう。 緊急時の世田谷区への対応方針として、どのような動きをするのか区民に伝えていく必要がある。 日本の都市部では、とりわけ集中豪雨の対応能力が弱く、危険である。ゲリラ豪雨は人災であり、個人での対策は不可能なため、行政の力で対策を行う必要がある。 区民が主体となり、行政とコミュニティが協働で地域の防災計画や防災カルテを作成していくことが大切である。防災対策を区民と行政で一緒に考えていくことが大切である。 災害時に拠点となる対策本部は機能するか。庁舎問題の検討が必要ではないかな。
<p>【環境と共生するまち世田谷の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ライフスタイルを見直し小さなエネルギーで豊かに暮らす社会をつくる 環境政策を通して、地域コミュニティを再構築する みどりと風景を次世代へと継承する 	<p>【環境・エネルギーについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 小さいエネルギーで暮らすため、ライフスタイルそのものの変革が必要である。 エネルギー施策の観点から、地域コミュニティの再現を検討するべきである。 	<p>【環境・エネルギーについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 環境問題の解決に向けて、省エネから小エネへと、自然環境との関係のあり方も含めた、ライフスタイルそのものの変革が必要である。ライフスタイルの変革に向けては、教育が重要なポイントとなる。 エネルギーを地産地消することや、地域の中で資源やエネルギーなどが循環するようなシステムを構築することで、その中で地域の人々が、子どもたちに暮らしぶりやライフスタイルを伝えていく。 エネルギーの観点から、地域のコミュニティを再現できる可能性もある。例えば、教育とエネルギーの連携を考え、小学校を地域のエネルギー施策の拠点とすることも考えられる。 商店街や公共施設を拠点としたクールシェアを導入することも考えられる。省エネだけでなく、高齢者の孤独死防止にもつながり、商店にとっても顧客が少ない暑い昼下がりの時間帯に人が来てくれるため、メリットがある。 区内の大学も含めて、新しい環境のベンチャー、技術を開発したり、奨励金を出したりして、若い人たちの新しい起業になったり、エネルギー・環境の取り組みをやるのはブランドになるし、産業的に潤うかというのはチャレンジになる。

第2部会の議論の整理

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
<p>【人材・地域資源を活かした職住近接のまち】</p> <ul style="list-style-type: none"> 働くところが住むところという住民を増やすことにより、地域力、住民力を強化する 	<p>【産業・仕事について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 職住近接により地域の力を強化するべきである。 分散型産業を振興する。 既存産業を支援する。 世田谷の地域資源を活用した「まちなか観光」を推進させる。 	<p>【産業・仕事について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 商店街の中に事業者と不動産所有者が分離した地域もみられる。このような地域では自助・共助の機能が弱い。道路の拡幅等で地価が上がると一層分離が進む恐れがある。 世田谷らしい産業をどのように考えるか。大規模な生産業は難しい。分散型で広いスペースを必要としないIT、デザイン、アート、大学、知的産業などがポイントになってくるのではないか。 ITを活用して職住近接で働くことができれば、子育てをしながら社会にも参加することができる。 普段からの顔見知りが防災力を高める。そのために区内で働く人を増やす新産業の創造や、既存産業の活性化が重要である。街づくり、産業、防災、学校など、昔からある資産を有効活用していくことが大事である。 地域資源の活用や新しい魅力の創造と「まちなか観光」を結び付け、交流人口・内需の拡大をねらうことができる。また、地域を旅する、まちを知る、地域を知ることは、防災面においても大事である。 若者が中心となり地域の産業資源を掘り起こし、世田谷ブランドを形成するような取り組みも必要である。
<p>【文化芸術を育み発信する】</p> <p>【地域の個性を活かした、歩いて楽しいまちづくりの推進】(再掲)</p> <ul style="list-style-type: none"> 誰もが歩いて暮らせる、地域で楽しめる、魅力にあふれたまちづくりを進める 	<p>【芸術文化について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化や地域資源を活用したまちづくりを進める必要がある。 文化施設の運営方法や運営を担う人を如何に育てるかなど教育も大事である。 図書館のあり方について再検討することが必要である。 	<p>【芸術文化について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 区内にある多数の文化施設は、一部を除き、ほとんどが貸し館を中心にしており、文化発信につながっていない。ハード面の整備だけでなく、運用面も課題である。 区内に住んでいる文化人に積極的に参加してもらうことが重要である。世田谷に住む多数の文化人の交流をコーディネートする機能が必要である。 地域が文化を育てる。区民が主体となり生活に身近な文化活動を行う場があれば、災害の際にも役立つだろう。 図書館を増やすということだけでなく、区内の各行政窓口で本を受け取ることができるサービスを展開するなど、住まいの近くで図書を借りられる仕組みを考えることは、機能の充実として重要である。成熟した区民は本を読む。 ビジネス図書館のような、ビジネスで本を置いているところが運営し、カフェと一緒に併設することで、ゆったり本を選別できたらよい。
<p>【誰もがまちで運動を楽しむ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「いつでも」「どこでも」「だれでも」「いつまでも」気軽にスポーツに親しみ、楽しむことができるまちづくりを進める 	<p>【スポーツについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> スポーツを通した地域コミュニティの形成、街づくり等を進める必要がある。 公園や学校を有効活用するなど、スポーツの場の確保が必要である。 	<p>【スポーツについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 暮らしの中でスポーツを位置づけ、スポーツを手がかりにコミュニティづくり（子ども同士、親子、高齢者と地域など）を考えるべきである。 子育て世代に対しては、スポーツは子育て支援とセットで考えるべきである。リフレッシュ保育等の支援の充実が重要である。また、子どもの遊び場がまちの中でどうあるべきかについても考えるべきである。 学校での指導者育成、区立小学校の専任教師制も含め、子どもの体力向上について考える必要がある。 区立の施設を借りるのは競争率が高い。コスト負担できる層を私立の施設に結び付け、負担能力のない子どもや高齢者を公的なサービスで補うことが大切である。特に高齢者がスポーツに取り組むことは、健康増進につながり、福祉の負担を少なくすることにつながるため、スポーツの機会をどのように地域ごとに作っていくかが重要である。 スポーツをする場が的確に配置されているか見直す必要がある。
<p>【多世代が交流する中で支えあう地域コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 多世代が日頃の様々な交流を通じて、お互いに支えあって地域を発展させていく 	<p>【コミュニティについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会を活性化し、防災対策につながるコミュニティづくりが大きな課題である。 コミュニティとして機能するきっかけや、地域の人々が交流するような仕組み作りが必要である。 元気高齢者の活用、マッチング機能が必要である。 孤立してしまいがちな人が地域に関わるためのきっかけづくりが大切である。 多世代間の支えあいが必要である。 	<p>【コミュニティについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 町会の活性化が重要だが、マンションができると機能しなくなることもある。町会を活性化し、防災対策につながるコミュニティづくりが大きな課題である。また、商店街・農地もコミュニティの核となる。 近年では、ごみを戸別回収しているが、ごみの出し方を地域の住民で共に考えることで、コミュニティとして機能するきっかけになるのではないか。 行政やNPO等が中心となって、子育てや介護等のニーズと地域の元気な人たちをマッチングさせる機能が必要だろう。 今後は行政の仕事を民間や地域の元気な高齢者に移管すべきだろう。たとえば、青色パトロールカーを商店街等が担うことで費用対効果が高くなるだろう。 若い世代をはじめとした人材が地域の発展に貢献し、かつ自分をアピールできる場があれば、世田谷の魅力になる。 地域の空き家等を活用して、地域の中で子どもが育っていくような仕組みが必要である。 シェアハウスの方法を用い、若者が一緒に住むことを促進し、災害時に助け合うような仕組みが必要だろう。この際には、地域の空き家やシェアハウス等に誘導する役割を持つ「地域ウォッチャー」のような人を設けてはどうか。 SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を活用し、コミュニティ形成に役立てることも考えるべきである。 水、資源、エネルギー等、生活に必ず用いるものを共同使用するような仕組みにより、コミュニティの形成を促していくことも考えるべきである。 職住近接に加えて、買い物や人との出会いができる場所も住宅と近接することで、濃密な地域社会をつくることができる。地域の元気な高齢者に地域のコミュニティづくりに関わってもらう仕組みがあるとよい。 学校のボランティアで、子どもに高齢者の買い物の付き添いを手伝わせる等、学校が人々をつなげる場になるとよい。
<p>その他（社会背景、全体に共通する事項など）</p> <p>【人口構成について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年齢の人口バランスを考えると、若い人に住み続けてもらうことが必要である。 担税能力が高い住民を惹きつけ続けるまちにする必要がある。 結婚しないと多くの場合は子どもを持たないため、結婚しやすい環境と結婚後に多世代で住める環境が必要である。 		

第2部会の議論の整理（基本理念、将来目標、重点政策の検討に向けた整理）

全体に共通するキーワード ※基本構想の基本理念の要素となるもの	区が特に目指すべき姿 ※基本構想の将来目標の要素となるもの	政策の方向性 ※基本計画大綱の重点政策・分野別政策の要素となるもの
<ul style="list-style-type: none"> ・ 防災と減災 ・ コミュニティ再形成 ・ 自助・共助・公助 ・ 区民と行政の役割 ・ 小学校の拠点活用 ・ 地域の人材育成 ・ 環境（自然）との共生 ・ 省エネルギーから小エネルギー ・ ライフスタイルの変革 ・ グリーンコンパクトシティ ・ 交通ネットワーク整備 ・ 歴史的文化資源 ・ まちをデザインする ・ 世田谷らしさ ・ 歩いて楽しい世田谷 ・ 多世代交流 ・ 暮らし方とスポーツ ・ 職住近接 ・ 区民が共に参加する・変革する・創る「新世田谷」 	<ul style="list-style-type: none"> ○防災コミュニティ都市世田谷 <ul style="list-style-type: none"> ・ 3.11の教訓を踏まえ、区民を主体とした災害に強い地域社会をつくる。 ・ 身近な拠点空間と延焼遮断効果などを持つ空間を整備する。 ・ 「減災」を共通キーワードとして、日常の地域住民のつながりを高める。 ○環境への負荷軽減をめざすまち世田谷 <ul style="list-style-type: none"> ・ ライフスタイルを見直し、小エネルギーで豊かに暮らす社会をつくる。 ・ 環境政策を通して、地域コミュニティを再構築する。 ・ 公共交通等の基盤を整備する。 ○魅力的で活気にあふれたまち世田谷 <ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの世代（若者、高齢者、男女など）が集い働き暮らすまち ・ 文化や地域資源を活用したまちづくりを推進する。 ・ みどりと風景を次世代へと継承する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校を拠点とした地域住民主体による防災活動、新たな被害想定への対応、行政との連携による復興の実施体制づくりを進める。 ・ 燃えにくく、延焼しにくいまちの実現に向け、延焼遮断帯となる道路整備等とともに新防火制度の導入や耐震化を進める。 ・ 普段から住んでいる地域を歩いて土地勘を持つことと、防災訓練等を通じた日常のつながりをつくることなどを奨励、推進する。 ・ 自然環境との関係・あり方を考えるライフスタイル変革の意識を高める。 ・ 公共交通機関（バス路線）や自転車（コミュニティサイクル）の利用促進を図る。 ・ 地域を環境施策の拠点とし、コミュニティとして機能するきっかけや地域の人々が交流するような仕組みをつくる。 ・ 多くの世代が生き活きと暮らし、小中学校等スポーツの場を拠点に地域コミュニティの形成を図る。 ・ 地域資源を活用し、まちなか観光を区内外にPRすることで、交流人口・内需拡大を狙う。 ・ 文化や歴史的な資源を大切にし、まちの個性や生い立ちなど、歴史や地域の特性を活かし、まちをデザインし、まちづくりを進める。 ・ みどりを守り、安全で快適な歩行、ランニング、自転車走行、運動の場としての道路や公園等の空間の整備を図る。

第3部会の議論の整理

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
<p>【基本理念】 第3部会の議論を通して、共通の理念となったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらゆる人が地域で暮らし続けられるまちになるために、何をすべきか ・地域資源を活かした住民参画により福祉・教育を充実する <p>【将来像】 今後、20年間を通して実現すべき将来の地域社会の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安心して子どもを産み、地域の中で子どもを育てられる ・子ども、若者が発言する場があり、その提案を生かせる ・子ども、若者、女性、障害者も高齢者も一人の人間として尊重され、社会参加できる 	<p>【コミュニティ・地方自治について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学、NPO、高齢者や主婦などの地域の人材など、世田谷区は地域資源の宝庫であり、積極的に活用してゆくべきである。また、そうした資源を活用することが、世田谷ならではのブランド創出につながってゆく。 ・民生・児童委員や保護司など地域での委嘱ボランティアの担い手が不足している。 ・ひとことに地域と言っても、区の話か、支所の話か、27地区なのか、もっと細分化した区域のことを言っているのか考える必要がある。 ・国・都と区の間だけではなく、自治体内の分権のありようと住民参加の手立ても課題となる。 ・若者、高齢者等、主体によりコミュニティの活動範囲が異なることを見据えながら、地域やコミュニティの議論を進めていくべきだろう。 ・居住率は低いが、多文化共生、外国人の課題は、国籍など具体的に想定して議論すべき。一時的在住ではなく、日本生まれの子ども等、長期的視野が必要である。 	<p>【コミュニティ・地方自治について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空き家を有効活用する仕組みが必要である。今後、相続等で空き屋が発生した際、区として公共的利用への寄付を受け、それを若者や地域のNPOが活用できるための仕組みづくりなど進める必要がある。 ・社会的ストレスが増大し、人権擁護の必要性が増す中で、既存の委嘱ボランティアを見直し、独自の委嘱ボランティアを作り出すことも考えうる。 ・様々な世代が自分のやりたいことに参加する場としての総合型地域スポーツクラブ等、皆が日頃から顔を合わせる場となる多世代交流施設が重要である。 ・安全安心が身勝手な解釈による自分のための安全・安心ではいけない。ご近所づきあい、絆といった一昔前の安全・安心を見直すべきである。 ・学校と地域、学校と子どもをつなぐ、地域のソーシャルワーカーというべき人材を育てる必要がある。 ・意欲ある市民が積極的に地域活動を行う場合、小学校が地域のコミュニティや防災の拠点となるポテンシャルを秘めており、弾力的な活用が期待される。 ・地域のつながりの創出、ネットワークの強化のために地域の住民が顔を合わせる場を創出することを考えると、今の時代は、防災が1つのキーワードとなる。 ・子育てひろば、学童クラブなども地域のつながりやネットワークの強化に活用できる。 ・かつては国の決定が地域においてきていたが、今は、地域の個人やグループの優良な取組が全国に展開される時代である。そのため、個人やグループの取り組みを区が積極的に支援してゆく仕組みをつくる必要がある。 ・様々な仕組みをつくっても、住民力がないとうまくいかない。住民が自ら社会参加をしていくような一種の社会教育が重要になってくる。 ・地域人材を養成する組織的な教育・学習の場を大学で設けるとよい。 ・多世代交流の場の運営は、行政や補助金に依存しない団体・企業等で運営できるのではないか。
<ul style="list-style-type: none"> ・男女共同参画を実現し、あらゆる人が、いきいきと働き、暮らしていける ・多様な文化、価値観を尊重し、共生できる ・個人の自立と責任を尊重するとともに、地域住民の連帯によって、あらゆる人が安心して暮らせる ・あらゆる機会住民参画を進め、区民が社会を構成する一員としての自覚と責任感を醸成できる 	<p>【子ども・教育について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校を拠点としつつも学校だけに依存しないで子どもの自主性・主体性・国際性を育てる新しい教育システムを構築する。その際、行政のあり方、指導者の確保も検討が必要となる。 ・昔は地域や家庭の中で子どもが社会と接する機会があった。世田谷っ子を育てるという観点からも地域連携の教育システムが必要となる。 ・少子化の進展の中で子どもは「世話をされる」ことが多い。現実の課題に対応する力を養うために小学生や中学生が「世話をする」環境を創出する必要がある。 ・親の一義的責任の自覚とその尊重を踏まえた子育て支援が必要である。 ・キャリアデザイン教育を進め、自分の得手不得手を知り、自尊感情を高めることは大事である。 	<p>【子ども・教育について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最近の子どもは、自然体験や文化体験等、多様な体験の機会が減少しているため、豊富な地域の人材を活用し、様々な体験をできる場を創出できるとよい。 ・不登校の子どもを含め、子どもが気軽に安心して立ち寄り、様々な体験のできる多様な学びの場があると望ましい。社会活動・貢献の場も必要である。 ・小学校は選択できないため、均質化が重要であり、人口の変化に合わせた統廃合等の議論を進め、最適化を図る必要がある。 ・他人事を自分事と認識できるような物事の関係性をつなぐ力を育むため、ディスカッション等の機会を積極的に創出してはどうか。具体的な場を与え、チームで目標を達成させることも大事である。 ・子どものスポーツや文化活動を考える上で、学校単位の部活動には限界があり、地域単位でのクラブづくりなど学校を超えた動きも検討したほうがよい。 ・細やかな子育てサポートと、知識や知見を活かした教育という2点においては、高齢者の活躍が期待される。 ・子どもたちの意見を聞く場を確保し、実現化を検討する仕組みが必要である。子どもの意見に対して、積極的に検討し、返信することが大事である。 ・子どもたちの意見を具現化する際には、子どもの役割を付与し、責任を持って実行させるべき。 ・社会規範や礼節の伝承の場として、柔道、茶道など「道」は切り口となりうる。

第3部会の議論の整理

基本理念・将来像	課題、現状認識	施策につながる方向性
	<p>【若者・青少年について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校卒業後、15歳以降の若者に対する支援が欠けている。(再チャレンジ、居場所支援等) ・地域での社会的起業等にも支援が少なく、インターンシップなども活発ではない。 ・20代の死因では自殺が一番多く、対策が必要。 ・地域での活躍の場を通して、地域の中で子どもも大人も育つまちをめざす。 	<p>【若者・青少年について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青少年にとって地域社会と関わることは非常に重要であり、中学生の45%が私立に通っていることも踏まえ、生徒・学生と地域の接点づくりを考える必要がある。 ・自主運営できるたまり場が必要。様々な課題を持つ人によるシェアハウスをベテランがマネジメントするなど、地域とのつながりが作られるのではないかと。留学生とのシェアハウスもよいのではないかと。 ・若者の居場所は、施設である必要はない。農地を活用した共同の農作業など、世田谷らしい居場所づくりがあるのではないかと。 ・若者をはじめとして、やり直しができる地域社会でありたい。
	<p>【家族について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代は、子どもが生まれてはじめて親として学ぶものが多い。保育施設等の整備は子育てを行政依存することになり、問題がある面もある。 ・家族の多様性を認識しながらも家族全体を支える仕組み、構造が必要となる。 ・20年後には、ステップファミリーが増加する等、家族のあり方も多様化する。 	<p>【家族について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、家族のあり様が大きく変わることが予想され、家族を丸ごと支えるしくみづくりが必要となる。 ・母子家庭や父親が単身赴任している家庭で母親が倒れたら子どもは孤立する。高齢者だけでなく、子どもにも孤立の危険性がある点には留意が必要である。 ・20年後には今以上に離婚が増加し、複雑化する家庭や増加するひとり親家庭への支援も大きな課題になる。生涯未婚者も大幅に増加すると予想され、検討が必要である。
	<p>【高齢者・障害者等の福祉、健康づくりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔に比べ元気な高齢者が増えており、高齢者が地域の人々を助けることで、自分自身も元気になるような仕組み、世田谷モデルを創出できるとよい。 ・長寿命化により、60歳はまだ人生の半分であるが、その先のライフプランを持っていない人が多い。 ・世田谷区の福祉はまだ施設型で、地域での暮らしを支える仕組みは不十分である。 ・自立、自己責任は重要だが、同時にあらゆる人が安心して暮らせる地域社会の実現も大事だ。 ・あらゆる人が地域で暮らすためには、「あらゆる人」がどのような人々かを考える必要がある。 	<p>【高齢者・障害者等の福祉、健康づくりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康寿命の延伸には区民の自覚も重要であり、社会教育も必要である。また、行政がどこまでサポートしていくのか考えることが必要になる。 ・元気な高齢者の人材活用（知的資源、コミュニティビジネスなど）を考える必要がある。 ・ライフステージごとに課題は異なるが、それぞれのライフステージごとに常に地域とかかわり、自己実現していくことが必要である。 ・個人のプライバシーの問題と安全という問題をどう市民の中に認識を深めていくかということが大切である。 ・行政情報を文書化、マニュアル化しても届かない層は必ず発生する。社会的マイノリティをサポートする仕組み、サポートを促す仕組みが必要である。 ・子ども、高齢者、障害者、女性といった個別支援ではなく、権利侵害が起きやすい人達の権利擁護が必要である。
	<p>【男女共同参画について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すべての人がその人らしく、いきいきと働き、暮らしていく社会の実現のためには、男女共同参画の推進が必要である。 ・若年者のデートDVや高齢者のDVなど、社会の中でDVが潜在的に進行している面があるのではないかと。 	<p>【男女共同参画について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健健康教育、男女共同参画教育、社会教育を全体で捉えることが大切である。 ・地域で活躍できる場所があれば、さまざまな人たちの能力が活かせる。 ・生涯未婚者の増などにより、生活能力不十分の男性が高齢者虐待を行うケースがある。高齢者虐待の加害者は実の息子である場合が最も多い。未婚・単身男性の生活能力向上は、無視できない問題だ。 ・避難所運営など防災では、特に男女共同参画の視点を取り入れる必要がある。
<p>その他（社会背景、全体に共通する事項など） 【計画全般、財政問題等について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・財政難のなか、区政として何を優先的にやらなくてはならないのかを打ち出していくのか。福祉及び教育を最優先に、と第3部会は宣言していくことが最も重要である。 ・財政が厳しい中で、地域資源の活用が必要。公益信託など資産の社会還元のための仕組み、地域での善意を目に見える形で活用するための仕組みを整備する必要がある。 ・生活保護世帯の増加に対する具体的な対応について、財政面と区民の生活格差の面から議論を深めなければならない。 		

第3部会の議論の整理（基本理念、将来目標、重点政策の検討に向けた整理）

全体に共通するキーワード ※基本構想の基本理念の要素となるもの	区が特に目指すべき姿 ※基本構想の将来目標の要素となるもの	政策の方向性 ※基本計画大綱の重点政策・分野別政策の要素となるもの
<ul style="list-style-type: none"> ・地域資源を生かす ・子ども、若者を含めた住民参画 ・子ども、若者、障害者も高齢者も一人の人間として尊重され、社会参加できる 	<ul style="list-style-type: none"> ○あらゆる人が地域で自分らしく暮らし続ける ・障害者、高齢者、子ども、外国人など立場の弱い人々の孤立化を防ぎ、見守りなど地域のサポートを充実するとともに、男女共同参画と権利擁護を進め、あらゆる人々が地域で暮らし続けられる地域社会をめざしていく。 ・誰もがやり直しができる地域社会をめざしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ライフステージ毎に地域と関わることで自己実現を図る。 ・高齢者、障害者、子ども、子育て家庭、若者、外国人など多様な属性を持つ人や多世代が交流し、支え合う場所をつくる。 ・家族のあり様が大きく変わることが予想され、家族全体が元気になるための支援を調整する総合的な仕組みをつくる。
<ul style="list-style-type: none"> ・男女共同参画を実現し、いきいきと働き、暮らしていく ・多様な文化、価値観の尊重 ・あらゆる人が安心して暮らせる地域社会 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域で担い手を育てる ・地域での活躍の場を通して、地域の中で子どもも大人も育ち、地域の担い手となっていく仕組みづくりを進めていく。 ・大学、NPO、地域住民など、世田谷区は地域資源・人材の宝庫であり、積極的に活用し、世田谷ならではのブランド創出につなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊富な地域人材を活用し、後進指導を担う場を設ける。 ・ライフステージに合わせ、支援されるだけでなく、支援する側として参画する場と機会を設ける。 ・防災をキーワードに、地域のつながりとネットワークの強化に向け、地域の住民が顔を合わせる場を創出する。 ・若者と地域社会が関わる機会を設け、地域での居場所と活躍の場を創出する。
<ul style="list-style-type: none"> ・地域とのゆるやかなつながり 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の中で子どもが育つ ・子どもが、自然体験や文化体験等、豊富な地域の人材を活用し、多様な体験の機会ができる場を設けていく。 ・親の一義的責任の自覚とその尊重を踏まえながら、多様な家族のあり方に対応した子育て支援を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが地域で多様な体験ができる場を設ける。 ・世田谷っ子を育てるという観点から、地域連携の教育システムを構築する。 ・学校と地域、学校と子どもをつなぐ、地域のソーシャルワーカーというべき人材を育てる。 ・子どもたちの意見を聞く場を確保し、積極的に検討し返す仕組みをつくる。 ・細やかな子育てサポートと、知識や知見を活かした教育という点で地域の人材の知識・経験を生かす仕組みをつくる。